



1. <人形> 空飛ぶツバメ

あるところに幸福の王子の像がありました。
体は金ばくで覆われ、目にはサファイア、剣（つるぎ）はルビーの宝石で飾られていました。

そこへ南の国へ急ぐ一羽のツバメが飛んできました。

「大変だ、すっかり仲間に遅れてしまったぞ」

幸福の王子の像を見つけたツバメは一晚そこで休ませてもらうことにしました。



2.

ツバメが王子のそばまでやってくると、なんと王子は目からポロポロ涙を流しているではありませんか。

「どうしたのですか？王子様」 ツバメが心配して聞くと、王子は答えました。

「世の中には気の毒な人がたくさんいる。その人たちのことを思うと悲しくて泣けてくるんだ。ツバメさん、ぼくの剣についたルビーを、貧しい親子のもとへ届けてくれないか？」

「わかりました、王子さま。私が届けてあげましょう」



3. <人形> ルビーをくわえたツバメ

ツバメは王子の剣からルビーを抜くと、貧しい親子のもとに飛んでいきました。

子供は病気で寝ています。母親は、薬代を稼ぐために、寝ずに服を縫っています。ツバメは自分の羽を大きく動かし、熱でうなされた子供に風を送ってやりました。パタパタ・・・。

そしてそっとルビーを置いていくのでした。

これで薬を買えれば、子供の熱もきっと下がるはずです。



4.

ツバメが王子のもとに戻ると、王子は言いました。

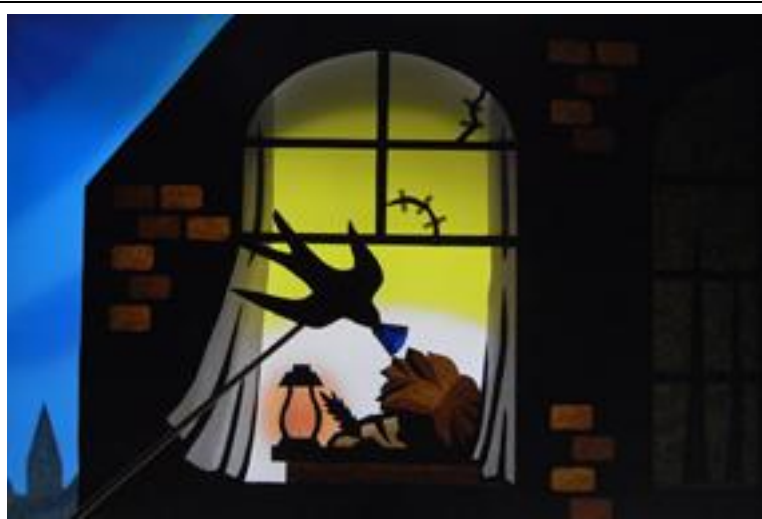
「ツバメさん、今度は私の目のサファイアを貧しい人のもとへ届けておくれ」でもツバメは戸惑います。

「王子さま、それではあなたの目が見えなくなってしまいます」王子は答えます。

「それでも構わない、さあ早く」

「わかりました。それでは、これからは私があなたの目になりましょう」

ツバメは王子の目からサファイアを抜き、貧しい人のもとへ飛んでいきました。



5. <人形> サファイアをくわえたツバメ

町のはずれの屋根裏部屋では、若い作家が芝居の本を書いていた。しかし部屋には何もなく、食べるものを買うことすらできません・・・。
才能はあるのに、貧しさのため体は痩せ、なかなか話の続きが書けずにいます。

そこへツバメがサファイアを届けました。これでしっかり食事をとれれば、きっといい本を書きあげることができるでしょう。



6. <人形> サファイアをくわえたツバメ

お屋敷の中では華やかな舞踏会が開かれています。
その外には、裸足で泣いている少女がいます。マッチを売りに来ているのですが、まったく売れないのです。もう何日も食事もとっていません。お腹をすかせた少女は絶えられなくて泣いているのです。

そこへツバメが飛んできて、王子のもう片方の目であるサファイアを、そっと置いていきました。
これで少女は靴を買い、お腹いっぱいおいしいものを食べるができるでしょう。



7. <人形> 前半、金箔をくわえたツバメを見せてもよいかも

王子の目がなくなると、ツバメは貧しい人たちを見つけては王子に知らせ、王子の体の金箔をはがしてはそれを届けて回りました。

やがて寒い季節が訪れたころ、王子の金箔はすべてはがれ、ツバメも南の国に渡ることをすっかりあきらめてしまいました。



8.

ツバメは寄り添うように王子の肩にとまると、自分の仲間たちのいるエジプトの話王子に聞かせてやりました。

「赤いトキは一列に並んでナイル川の上を飛び、金色の魚をとるんですよ」とか「スフィンクスは世界の始まりから砂漠にいて、知らないことはなにひとつないんですよ」など……。不思議な話はずきません。

王子はそれをうれしそうにだまって聞き、見たことのない南の国を思い描くのでした。ツバメは自分が飛んで行くはずだった暖かいエジプトの風景を懐かしく思いながらも、今はこうやって王子のそばにいられることを幸せに感じているのでした。



9. <人形> 空飛ぶツバメ

やがて雪が降り出しました。町中が寒さで凍りついています。

「さよなら、王子さま、もうお別れです」ツバメは王子にそっと口づけをすると、そのまま力尽き、すーっと落ちていきました。

寒い国で、ツバメは生きていけないのです。



10.

ツバメが王子の足元に落ちて、息耐えた次の瞬間、王子の鉛（なまり）の心臓がパキンと音をたててふたつに割れました。

王子もまたツバメとともに魂（たましい）を失ったのです。



11.

翌日、すっかり色あせた王子の像とツバメの死骸を見て町の人たちは言いました。
「なんてみすぼらしい、早く捨ててしまえ」

市長や議員たちもやってきて、次は自分の銅像をたてようと、もめ始めています。

王子の像はあっという間に取り壊され、溶鉱炉（ようこうろ）で燃やされてしまいます。そして焼け残った鉛の心臓は、ツバメの死骸とともに町のはずれに捨てられてしまいました。



12.

その頃、天国では神様が天使に命じていました。

「この世で美しく尊いものを2つだけ持っておいで」

天使は地上に降り、王子の鉛の心臓とツバメの死骸を手にとると、大事に抱えて天国に戻っていきました。

「これぞ尊いものだ」神様は深くうなずいて言いました。そして王子とツバメは、神様の計らいで、花畑と黄金の町のある天国で、いつまでも幸せに暮らしました。

ずっと一緒に、そして楽しく……。

おしまい。

<人形>

- 空飛ぶツバメ（場面1・9）
- ルビーをくわえたツバメ（場面3）
- サファイアをくわえたツバメ（場面5・6）

～注意事項～

- ▲影絵は、水滴に弱いので濡らさないようご注意ください。
- ▲台紙のトレーシングペーパーが破けたり、傷ついたりしないようご注意ください。
- ▲もしも、紙がはがれかけたら、「スティック糊」で軽くとめてください。
（*液体糊は、シワになります）
人形も、軽くスティック糊で固定しているだけです。
裏面カラーフィルターは、セロテープで補整してください。
- ▲上演は、朗読者、人形を動かす人、影絵をめくる人、と3人で行うとスムーズです。
- ▲かなりゆっくり朗読したほうがいいようです。
- ▲お話の文章は、自由に変えて結構です。人形を観ている人の前に近づけるなど、いろいろ試してみてください♪
- ▲部屋はなるべく暗くし、後ろから光を当てるのが効果的です。
- ▲この影絵紙芝居は、皆さんでご利用いただいています。破損にはじゅうぶんお気をつけください。